

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス・コード{a ¥ 1 6 9 0 / A ¥ 1 8 9 0 / B ¥ 2 0 9 0 / C ¥ 2 2 5 0 / D ¥ 2 4 9 0}
(表示価格は税抜き) 別途消費税が加算されます

www.tambourine-japan.com email: song@tambourine-japan.com

注文方法サイト: <http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm>

[CD/USA {female}] (P15) [CD/CANADA] (P19)

[DVD&CD/USA]

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *STEVE EARLE:Live From Austin Tx (DVD) B
*STEVE EARLE:Live From Austin Tx (CD) A
(2000年11月、Austin City Limits でのライブ。バックは Eric Ambell {ギター}、Kelly Looney {ベース}、Will Rigby {ドラムス}。全15トラックの74分。2008作。New West)

[DVD/USA] NTSC all regions

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *EMMYLOU HARRIS:Live In Germany D
(2000年の Spyboy をバックにしたドイツでのライブ。全13曲。2011作。Immortal)
- *DOWN HOME MUSIC "A Journey Through The Heartland 1963" D
(1963年のアメリカ各地の様々な音楽の記録 DVD だ。ドイツ人 Dietrich Wawzyn がアメリカのルーツ音楽を求めて各地を旅して記録した映像で、Jesse Fuller のブルースを皮切りにカリフォルニアを南下し、黒人ブルース、ジャズ、フォーク、ブルーグラス、ネイティブ・アメリカンの音楽、教会の黒人音楽、テキサスに入って、Lightnin' Hopkins や Mance Lipscomb の弾き語りやスライド・ギターのブルースやホーン・バンド、そしてルイジアナに下って、ブルーグラスや黒人ブルースやテキサス・ジャズや葬儀の音楽、テキサスではヒル・リバーやカントリーや演芸カントリー、そして路上の黒人ブルース、最後はノースカロライナの オールド・タイム・ミュージックという流れ。2010作。75分。Arhoolie)
- *BOB DYLAN:Don't Look Back B
(1965年イギリスツアーのドキュメンタリー。1時間35分。67/99作。Docurama)
- *CROSBY, STILLS & NASH:Live In L.A. B
(1982年サンゼルの New Universal Amphitheater でのライブ。全23曲で80分。2007作。オランダ Immortal)
- *BRUCE SPRINGSTEEN:Classic Performance B
(B. Springsteen の初期のベストライブ集。1988年と2005年のカバー・ライブ。American Legends)
- *BIG BROTHER AND THE HOLDING COMPANY:Hold Me B
(2007作。Dig Music)
- *ELIZA GILKYSON:Live From Austin Tx a
(2001年8/13、Austin City Limits でのライブ。全11曲。53分。2007作。New West)
- *GRAM PARSONS:Fallen Angel a
(ドキュメンタリー-DVD。103分。2006作。Rhino)
- *ANI DIFRANCO:Trust D

(2004年5月11日&12日の二日間行われた Washington DC のクラブでのライヴ。全21曲。2004作。Righteous)

- *STEPHEN STILLS AND MANASAS: The Best Of Musikladen B
(72年のテレビ・ショーのライヴ映像。40分。Pioneer)
- *WILLIE NELSON: Willie A
(91年の“The Great Outlaw Valentine Concert”{全14曲}と
“Nashville Superstar Concert”{全12曲}。88分。2002作。MVD)
- *TONY JOE WHITE: In Concert A
(92年ドイツのライヴ・ハウスでの熱いライヴ。全11曲。約60分。ドイツInakustik)
- *JOHN DENVER: Montana Christmas Skies A
(全14曲。47分。99作。Delta)
- *DUKE ROBILLARD: In Concert B
(94年ドイツのテレビ出演時のライヴ映像。全10曲。2001作。ドイツInakustik)

[DVD/USA] PAL all regions

※PAL専用DVDプレイヤーかパソコンで再生可能

- *EMMYLOU HARRIS: Love Hurts a
(“In Concert”。ゲスト: Carl Jackson, Dave Matthews。全15曲。64分。
2005作。ドイツAll Stars)
- *WILLIE NELSON&LEON RUSSELL: In Concert a
(Paradise Showのライヴ。Leon[ピアノ]とWillie[ギター&ピアノ]のアカステイ
ックなソフとデュエットそしてMaria Muldaur&Bonnie Raittそしてフルバンド
の数曲は二人の持ち味がたっぷり楽しめるライヴ。55分。2005作。
ドイツAll Stars)
- *JAMES TAYLOR: In Concert a
(副題“You've Got A Friend”。バンド付き18曲入りライヴ。“Sweet Baby
James”から変わらぬJamesの温厚な人柄がそのままかつ音楽性も
シンプルなのからポップでファンキーなのまでそのままの温かいライヴ。2004/
2005作。82分。ドイツAll Stars)

[DVD/USA] NTSC Region 1

※NTSC Region 1専用DVDプレイヤーかパソコンで再生可能

- *JIM GROCE: Have You Heard — Live D
(“You Don't Mess Around With Jim”, “Operator”, “Bad, Bad Leroy
Brown”他全15曲入りライヴ。約1時間10分。2003作。Shout)

[DVD-AUDIO/USA]

※国内製DVDプレイヤーで再生可能

- *JOHN SEBASTIAN: From The Front Row, Live ¥1000
(全16曲入り弾き語りライヴ。画像はライヴ映像ではなく、1曲1曲静止
映像。2003作。Silverline)

[VIDEO/USA] 日本のVHS方式でご覧になれます

- *ALLMAN BROTHERS BAND: Live At Great Woods D
(Gregg Allman, Dickey BettsほかによるAllmanの91年のライヴ。11
曲。90分。92作。Sony)

*STEVE EARLE&THE DUKES:Transcendental Blues Live D
(全 17 曲。70 分。2000 作。E-Squad)

*TROUBADOURS OF FOLK MUSIC D
(93 年 UCLA でのライブ。Arlo Guthrie, Richie Havens, Beausoleil,
John Prine, Janis Ian, Jefferson Starship, Janis Ian, Odetta。
54 分。94 作。Rhino)

[CD/USA]

*TOM RUSSELL:Play One More B
(副題“The Songs Of Ian & Sylvia”。しばらく聴いてなかったせ
いか、T. Russell のわずかにヴィヴラートのかかった声を聴いて
懐かしい気分になった。しかも本作は Ian&Sylvia のカバー集。相
方にどうしても女性シンガーが欲しかったのだろう。Cindy
Church とのデュエットは息もピッタリで、二人で噛みしめるよう
にうたう一曲一曲は、Ian&Sylvia の唄と同化して、明日の希望を
うたうように唄が力強く輝いている。いたるところで、T. Russell
かも知れないが、リード・アコースティック・ギターの Grant
Siemens の泣きのギターが光っている。Ian&Sylvia の未発表曲二
曲のボーナス曲を含む 14 曲。2017 作。True North)

*BOBBY OSBORNE:Original A
(ブルーグラス界の大御所 Osborne Brothers の兄貴の方の Bobby の
ソロ。e More リリース時 80 歳の Bobby のヴォーカルはまるやかだ
が、ちっとも爺さんじゃない。Stuart Duncan や Alison Brown や
Jim Lauderdale や Sierra Hull や Rob Ickes や Sam Bush や Todd
Phillips や Buddy Spicher や Kenny Malone や Claire Lynch や Del
McCoury などのハッスルした軽やかな演奏の力もあって、なんだ
か滅茶苦茶健やかで爽やか。あまりブルーグラスは好んでは聴か
ないが、本作での爽やか感とアットホーム感のあるサウンドは、
最高に心地よい。Osborne 爺さんを囲んで、同窓会気分音楽パー
ティーを開いているかのよう。肩肘張らない Bobby 爺さんの唄が
これまた心地よい。2017 作。Compass)

*NORTH MISSISSIPPI ALLSTARS:Prayer For Peace A
(実質的に Luther&Cody Dickinson の二人組による南部ロック！
たった二人でやってのけてしまう南部ロックの本醸造なこと！
主要楽器はスライド・ギター&エレキギターとドラムス。たった
これだけの楽器でディープな南部ロックを体現してしまうのだ
から、恐れ入ってしまう。ヴォーカルを含め、「音」のすべてが全身
全霊で父親譲りの南部ロックを志向していて、発せられる「音」す
べてが圧巻！今の時代、真の南部ロックを体現出来る二人の存在
は大きい。7 人のシンガーやミュージシャンが 1 ~ 2 曲でゲスト
参加している。2017 作。Songs Of The South)

*JAMES LUTHER DICKINSON FEATURING NORTH MISSISSIPPI
ALLSTARS:I'm Just Dead, I'm Not Gone“Lazarus Edition”A
(2009 年に 67 歳で亡くなった James Luther Dickinson が、2006 年 6
月 2 日、息子二人 {Luther&Cody} が主要バンド・メンバーの南部ロ
ック・バンドの North Mississippi Allstars を従えて行ったコ

ンサート・ライブ音源からのスペシャル・エディション版。スワンプの名盤の誉れ高き彼のデビュー・アルバム“Dixie Fried” [1972年]で出逢ってから、南部音楽一途だった James Luther と彼の音楽を受け継ぐ North Mississippi Allstars とによる、説明不必要な骨太で本醸造な南部ロック～スワンプ。2006年/2017作。(Memphis International)

*THE SHOW PONIES:How It All Goes Down A
(Show Ponies は Clayton Cheney {ヴォーカル、ベース} と Andi Carder {ヴォーカル、バズ} の男女のリード・ヴォーカルに Jason Harris {ヴォーカル、ギター}, Philip Glenn {フイドル}, Kevin Brown {ドラムス} を加えた一姫四太郎の、ロスを拠点に活動するルーツロック・バンド。彼らのロックは二人のヴォーカルを含めて、ルーツ色が濃く、また 70 年代のカントリー・ロックのように音楽に活気がみなぎっていて、雑草のようにたくましい。デジタルの時代に対抗するかのような彼らの健やかなルーツロックは、心身を元気にしてくれる。2017 作。Freeman)

*DARDEN SMITH:Everything A
(テキサスのヴェテラン SSW の D. Smith の新作は、1970 年代のアサイラム系 SSW の雰囲気を漂わす SSW アルバム。D. Smith は元々、テキサスの SSW でありながら、+α な繊細な輝きを感じさせる SSW だが、本作は特に内省的というか、彼の心模様がロマンティックに表現されていて、西海岸っぽい陰影感あるサウンドと相まって、彼の唄の世界は最高に輝いている。w. David Mansfield, Charlie Sexton, Roscoe Beck, JJ Johnson, Michael Ramos, James House, Beth Nielsen Chapman, Bonnie Bishop, Kelly Willis。2017 作。Compass)

*SON OF THE VELVET RAT:Dorado A
(SotVR はオーストリアの SSW の Georg Altziebler と彼の奥さんの Heike Binder を中心に結成された米国ルーツロック・バンド。Joe Henry をプロデューサーに迎えてカリフォルニアで録音された本作は、夫妻の夢の企画が実った米国ルーツロックの酸いも甘いも知った大人のルーツロック。全編、Georg の、例えば Jack Hardy のような間の中から発されるような深く荒涼感が漂うヴォーカルとゆったりとしたミディアム・テンポ以下のロックは、ある種夢の中に誘われるような旨みのあるロック。ゲスト:Victoria Williams。2017 作。Fluff&Gravy)

*STEVE FORBERT:Flying At Night A
(Steve Forbert の 17 枚目のスタジオ録音アルバムは、1992 年リリースの“The American in Me”以来付き合いのあるマルチ楽器奏者の Anthony Crawford {バッキング・ヴォーカル、ドラムス、ベース、エレキギター、キーボード、マンドリン、フイドル、ペダル・スティール} とのコラボ。聴き親んだ Steve Forbert のしゃがれ声だが、ルーツロック系 SSW アルバムとして必要最低限の軽めの伴奏で、自作の夢うつつな唄を軽めにうたったようなリラックス&レイドバック感が何とも心地よいホームメイドな温かみのあるアルバムだ。じわじわと病みつき。2016 作。Rolling Tide)

- *JACK GRELLLE:Got Dressed Up To Be Let Down A
 (聴くなり馴染んで、すぐに和んでしまった、まるで70年代の緩くて人なつっこい唄たち。ヴォーカルの感じはJohn Prineっぽい、Michael Hurleyのような、とぼけた悠長さもあったり、Jesse Colin Youngと彼の仲間達が立ち上げたラクーン・レコード一派の音楽のような70年代の西海岸田舎志向カントリー・ロック風のんびり感もあったりで、個人的に全くの「好み」。演奏は無名のミュージシャンばかりのカントリー・ロック・バンド編成で、演奏の緩さも魅力。心も体もニコニコ保証。2016作。Big Muddy)
- *THE KENTUCKY HEADHUNTERS:On Safari A
 (こんな豪腕カントリー・ロック&南部ロック・バンド知らなかった。バンドが結成されたのは1986年だが、バンドの始まりは1968年だという。一聴すれば、彼ら四太郎アメリカン・バンドのロックの本物度がガンガン体感できる。スライド・ギター、エレキギター、ドラムス、ベースは重厚感あるアメリカン・ロックを叩き出し、ヴォーカル&ハーモニーは、土臭く泥臭く、テンションが高い。百戦錬磨な上に、凄いパワーを持った凄いバンドだ。2016作。Plowboy)
- *TONY JOE WHITE:Rain Crow B
 (アルバム評なんて失礼にも感じるどころか「Tony Joe White」なスワンプ。名作“Homemade Ice Cream”のような穏やかさだが、年季というか年輪というか、終始ひとことでは言い表せない重みがある。w. Bryan Owings{ﾄﾞﾗﾑｽ}、Steve Forrest{ﾊﾞｰｽ}、Tyson Rogers{ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ}。プロデュースは息子のJody White。2016作。Yep Roc)
- *TONY JOE WHITE:Deep Cuts B
 (南部男 Tony Joe の最深部から生まれた南部ロック。2008作。Munich)
- *DANIEL MARKHAM:Disintegrator a
 (Terry Allen や Flatlanders タイプとの紹介を見て、興味を持ったテキサスの若きSSWのDaniel Markhamの新作。期待した両大物の土臭さや泥臭さは薄いが、それよりもR. E. M. タイプの西海岸志向のビターズウィートなルーツロックを若者らしく、かつこよくガンガン聴かせていて、いやはや圧巻。Daniel自身の唄も今が旬の夢の輝きを放っていて、一曲一曲がこだわりの重厚なルーツロック・サウンドと共に、聴き応えたっぷり。不思議と曲が印象的で、ふとしたときに頭の中で彼のうたが鳴っている。2016作。簡易紙ジャケット)
- *THE STATESBORO REVUE:Ramble On Privilege Creek B
 (Statesboro RevueはStewart Mannの南部ロッカーの貫禄たっぷりなヴォーカルをフィーチャーしたルーツロック・バンド。彼らのロックは、70年代の南部志向、特にCapricorn産のアメリカン・ロックの匂いが充満。無骨というか、荒削りというか、骨太なロックを体現していて、しかもStewartの入魂のヴォーカルと相まって、聴き応え十分。すべてが70年代のバンドがひょっこり現代に姿を現わしたかのような「音」だ。2013作。Blue Rose)

- *MUSTARD' S RETREAT:5 Miles Or 50,000 Years A
 (1970年代から活動する二人組{David Tamulevich & Michael Hough)の1990年のライブで発売は1993年作。本作は約半数が二人の心温まるオリジナル曲で、米国フォーク流のストーリーテリングな唄の世界を楽しませる。全14曲。1993作。Mustard's Retreat /発売年の古いCDですので、検盤をしてお送りします)
- *PROFESSOR LOUIE AND THE CROWMATIX:Wings On Fire a
 (The Bandのロック・スピリットを受け継ぐウッド・ストックのロック・バンドの本作はRick DankoとLevon Helmに捧げられたもので、そのスピリットは一段と高潔。彼らのロックはLevon Helmのスタイルを基本にニューオーリンズ色やロック色を濃くしたもので、そのエネルギーは熱い。ゲスト:John Platania, Michael Falzarano。2012作。Woodstock)
- *CASPAR BABYPANTS:Night Night A
 (本作は本当に平和な平和で、可愛らしい子守歌集。Chrisの唄もサウンドも素朴でひたすら優しい。John B. Sebastianが気の合う仲間達とほんわかほんわかに子守歌をうたったって感じ。音楽の響きの古き良き米国音楽っぽさにも親近感。CD収納型簡易紙ジャケット。2015作。Aurola Elephant Music)
- *RICHARD DOBSON:Here In The Garden ¥1500
 (Townes Van ZandtやGuy Clarkと共にテキサスのフォーク・シーンを引っ張ってきたRichard Dobsonの六枚目。本作はRichardが1999年にドイツをツアーした時に組んだバンドのリダーのThom Jutzをギターと共同プロデューサーで迎えて制作したアルバム。本作は、うたうこと、バンド仲間と音楽することを楽しむかのように、ゆったりとロックン・カントリーしていて、快適。2013作。Brambus)
- *MIKE LAUREANNO:Pushing Back Wintertime B
 (Mike Laureannoは、今は亡きJack Hardyのハイパートのヴォーカル・ハーモニーのシンガーとして、かれこれ12年間、Jack Hardyと活動を共にしてきたSSW。Jackに較べ、Mikeの声はやや高めなのだが、押し殺したようなかすれた声まで似ているのだから。MikeはJackから唄の心を学んだようだ。2013作。Mike Laureanno)
- *KEITH SYKES:It's About Time(1993作。Oh Boy) A
- *TOM RUSH:Celebrates 50 Years Of Music D
 (CD+DVDセット。Tom Rushの音楽人生50周年記念のライヴ。録音は2012年12月28日。DVDを見た。ゲスト{David Bromberg, Jonathan Edwards, Buskin&Batteau, Dom Flemons}全員集合のもと、Tom Rushの唄“Hot Tonight”で幕開けした後、ゲストの唄が7曲。Tomの出番はその後、8曲。ひょいっと70年代にタイムスリップ。映像で見るTomは現役バリバリの印象。ボーナスにはインタビュー、リハーサル風景そしてDavid Brombergの“Tongue”他4曲がライヴで収録されている。CDはDVD収録曲16トラックから13トラックを収録。2013作。Appleseed)
- *US RAILS:Heartbreak Superstar A
 (Tom Gillam, Ben Arnold, Scott Bricklin, Matt Muir, Joseph Parsonsの誰もがヴォーカルを担う今日のアメリカン・ロック・シーンで、最も愛すべきバンドのひとつ、US Railの新作。70年代の主に西海岸のロック・バンドが保持していたアメリカン・ロックの土臭さや泥臭さを濃縮したロック

は、昔どこかで聴いたことがあるようなウォールやサウンドで、体にすこぶる美味しい。バンドの連中皆が、昔のロックに夢を馳せて、夢を追っかけてロックしているような素敵なロックだ。2013 作。Blue Rose)

*THE DIRTY GUV' NAHS

:Somewhere Beneath These Southern Skies A

(ナッシュビルのがっつあるルーツ・ロック・バンド。本作は3枚目。ナッシュビルと言えば、昔はカントリーのメッカだったが、彼らのロックは南部っぽくて結構気骨があって、真に切なロックを体現する。リード・ウォールの James Trimble の、アメリカン・ロック魂のあるソウルフルなウォールは、骨太なバンド・サウンドと一体となって凄いインパクトがある。Levon Helm Band との共演、そして Levon Helm のスタジオでの録音経験もあるそうだ。ラストの“One Dance Left”では、Levon Helm っぽいウォールを振り絞ってもいる。2013 作。Blue Rose)

*I SEE HAWKS IN L.A.:Mystery Drug A

(ヘンなグループ名。総勢8名編成のこのバンドは、1999年にLAで結成されたという。バンド編成はアルバムを出すごとに変わっていて、以前のアルバムには Chris Hillman も一員だったことも。唄も音楽も、まるで昔の西海岸の自然派カントリー系ロック達のように大らか。音楽を楽しむ空気が伝わってくる。2013 作。Blue Rose)

*ANDREW CALHOUN:Living Room a

(本作で聴く Andrew の唄は、唄に揺ぎがなく、大きな優しさのようなものが感じられて、Andrew の SSW としての成長というか、円熟味が感じられるもの。自室でアコースティック・ギターを爪弾き、リラックスしてうたう Andrew の数々は、心穏やかにする。w. Casey Calhoun (Andrew の娘さん。素直な唄が気持ち良い)、Tracy Grammer, Jenna Rawling, etc. 2013 作。Waterbug)

*AD VANDERVEEN:Driven By A Dream B

(Iain Matthews とのデュオ“Iain Ad Venture”の Ad Vanderveen の本作はとこところ Neil Young with Crazy Horse をもホッさせる思いっきりルーツ回帰&若かりし夢回帰の見事なアメリカン・ルーツ・ロック。至福保証。2012 作。Blue Rose)

*DAVID MUNYON:Pretty Blue C

(D. Munyon の本作は、彼の人生を振り返る内容のアルバム。齢を重ねた David のしゃがれ声は益々味わいが深くなって、これまでの内省的ニュアンスのどのアルバムよりも心の底に響くものになっている。2011 作。Stockfish)

*MICHAEL JOHNSON:Moonlit Deja Vu a

(ミネソタのヴェテランSSW の M. Johnson の12年振りの本作は月を眺めながらロマンティックな気分にはほんわかと酔うような感じ。ギター名手でもある寡黙だが、星の輝きのある美しいギターを伴奏に、ほのぼとと一人、そして娘の Truly や Maud Hixson 嬢とデュエットで、酔うようにうたう。2012 作。Red House)

*MARK DVORAK:Time Ain't Got Nothin' On Me a

(フォーク・ギター、ブルース・ギターのギター演奏にも定評のある M. Dvorak だが、曲調により様々な表情を見せる鮮やかなギターの伴奏に乗ってうたわれる彼の唄は体の芯から暖まる優しい眼差しの穏やかで優しい

唄。ギターのメリハリがしっかりしているせいか、彼の穏やかな唄の穏やかさが引き立つ印象で、ふわふわと極楽な気分になる。ゲスト:

Michael Smith。2011 作。Waterbug)

- *LONG GONE "Utah Remembers Bruce "Utah" Phillips a
(70 年~80 年代、Utah Phillips 作の唄をうたう SSW が本当に多かった。本作は Utah の唄に影響を受けたという SSW の Kate MacLeod が Utah の息子の Duncan の協力を得て制作した Utahソング集。Philo が存在していたら、Philo が真っ先に企画しそうなアルバムだ。トラックの語りと一曲グループの唄以外の 16 曲は全て Utah の唄を愛する SSW によるギター等の弾き[奏き]語り。Kate MacLeod 以外は初耳の SSW ばかりなのだが、一曲一曲の「唄」が瑞々しく新鮮。2011 作。Waterbug)
- *MAD BUFFALO:Red and Blue a
(カントリー・ロックは不滅を実感させるナッシュビル of SSW の Randy Riviere がヴォーカルの Mad Buffalo。カントリー・ロックのスタイルだが、一つ一つの唄は Randy の SSW としての持ち味が出ていて、むしろその各曲の個性がカントリー・ロック・スタイルの音作りをどこかカントリー・マンのロマンっぽい深みのあるものにしていて、Randy の唄の味わいも深まっている。w. Reggie Young, Chad Cromwel [Neil Young Band], etc. Mad Buffalo)
- *RANDY BURNS:The Simple Things a
(昔のままの瑞々しい 2008 年作。CD-R。自主制作盤)
- *CARTER BROTHERS:The Road To Roosky a
(これは気合の入ったブルークラス系カントリー・ロック。カーター・ファミリーの家系の Tim&Danny 兄弟の本作はカントリー/ルーツ・ロックの深さが違う。骨太のカントリー・ロック。w. Sam Bush, Tim O' Brien, Ferrell Stowe。2011 作。Compass)
- *ERIC ANDERSEN:Blue Rain C
(E. Andersen の本作は闇の中で直向きでブルかつブルス色濃厚なルウエーでの 2006 年のライヴ。本作の彼は何かに取り憑かれたように凄い。2006 作。ルウエー-Blue Mood)
- *ERIC ANDERSEN:Ghosts Upon The Road A
(88 作。カタ Alert Music)
- *BILLY C. FARLOW:You Better Run a
(元 Commander Cody&His Lost Planet Airmen の Billy の本作は重厚な南部ロック。w. Mary-Ann Brandon, Fred James, Jeff Davis, Mark Horn。2011 作。ドイツSPV)
- *GREG BROWN:Freak Flag A
(ブルース、カントリー、フォーク等アメリカン・ミュージックの要素混在で、G. Brown 印の煮込み味 SSWアルバムを創作し続けて彼だが、本作も同じ。この旨みある味わいは彼にしか出せない。w. Bo Ramsey, Mark Knopfler, Richard Bennett, David Mansfield, etc. 2011 作。Yep Roc)
- *GREG BROWN:Dream City B
(副題"Essential Recordings Vol. 2, 1997 - 2006"。1997 - 2006 の間収録の Red House と Trailer の音源からの 16 曲と未発表音源からの 4 曲の二枚組。2009 作。Red House)
- *AZTEC TWO-STEP:Days Of Horses a
(初めて聴いた時、耳を疑った。Rex Fowler&Neal Shulman の Aztec の唄は彼らの 72 年のデビュー作と変わりなく、深緑の若葉のように清

々しい。二人によるヴォーカル・ハーモニーの初々しさは彼らならではのものの。2004年のベスト・アルバム。CD-R。Red Engine)

- *RICHIE FURAY: I Am Sure a
(Poco/Richie Furayファンだったら“The Heartbeat Of Love”と同じくらい歓喜の声を上げることに必至のベスト・アルバムが2005年の最高にご機嫌なRichieのアルバム。共演者はChris Hillman, Dan Dugmore, Jimmy Ibbotson, Bob Carpenter, Jeff Hanna, Michael Rhodes, etc. もうこれは出来すぎなくらいなRichieがリード・ヴォーカルのPoco風カントリー・ロック。全13曲。ItsAboutMusic.com)
- *JAMES McMURTRY: Childish Things a
(昨今のRay Wylie Hubbardクラスの泥臭く、ずっしり重みのあるアメリカン・ロック。ヴォーカルもサウンドも地鳴りがするほど鈍く唸りを立て凄みを放つ凄いロックだ。2005作。Lightning Rod)
- *STEVE EARLE: Washington Square Serenade B
(CDとDVDのセットの限定盤。DVDは国内プレイヤーで再生可。S. Earleの本作はまるでデヴィアズ・フィルムの霧囲みの、初期Dylanやそれを通り越してアメリカン・フォーク的土臭さに到達したりもする文字通りアメリカン・ミュージックの根っ子回帰志向アルバム。DVDはニューヨークのスタジオ・ライヴ3曲他で37分24秒。2007作。New West)
- *PONDEROSA: Moonlight Revival A
(南部アトランタから颯爽とデビューした4人組ロック・バンドのPonderosaは南部魂を持った、若いながら、今どき珍しく骨のあるアメリカン・ロック・バンドだ。南部系アメリカン・ロック・バンドのヴォーカルとしては理想的なKalen Nash [男性]のソウルフルなヴォーカルに粘っこいエレキ・ギターと重厚なロックはもう抜群。2011作。New West)
- *KIP BOARDMAN: The Long Weight a
(音楽的にはHarry Nilssonに近いだろうか。唄が自由に散歩でもするかのように軽やかで、豊かなイメージが広がる。ヴォーカルはSteve Forbertっぽい。Gia Ciambotti, Claire Holley, Kristin Mooneyの女性バック・ヴォーカルを含め、バンドのサウンドがオール・アメリカン・ミュージックのスケールで巧み、かつ自在で見事。2010作。Ridisculous)
- *STORYHILL: Shade Of The Tree a
(自主制作で12枚のアルバムを発表し、2007年にRed Houseから“Storyhill”を発売し、多くのSSWファンを虜にしたChris Cunningham & John Hermansonのヴォーカル・デュオ“Storyhill”の本作は、SSWの唄心というか良心が詰まった湧き水のごとき清き逸品。2010作。Red House)
- *JIM POST: Reach Out Together A
(白髪の爺さんになったJimの声は軽やかで若々しい。Jimの飄々とした唄とMoby GrapeのJerry Millerの歯切れの良いギター、そしてRandy SabienのフィドルとAndy Steilのストライド・ギターやバンジョーはぴったり噛み合っていて、抜ける青空のような屈託のないJimの唄は最高に輝いている。2009作。Jim Post)
- *GEORGE ENSLE: Build A Bridge A
(Townes Van Zandtが「George Ensleは最も影響力のある尊敬すべきSSWの一人」と賞賛するテキサスのヴェトナムSSWのGeorgeの唄ほどこと

- なく Jerry Jeff Walker の風合いなのだが、精神が自由というか飄々としていて、唄に爽やかさが感じられる。Bill Staines 的な風合いも。SSWファンの愛聴盤になること請け合い。2008 作。Berkalin)
- *MARK STUART: Songs From A Corner Stage (99 作。Gearle) A
- *BUTCH HANCOCK: War And Peace A
(初期 Dylan を想起させる彼本来の粗い肌触りの引きずるような唄は流石。抜群の最近作。w. Joe Ely, Jimmie Dale Gilmore, Rob Gjarsoe。2006 作。Two Roads)
- *ERIC TAYLOR: The Kerrville Tapes a
(Kerrville Folk Fes でのライブからの全 10 曲。全曲ギターの弾き語りだが、鮮やかなアコースティックギターの伴奏とまるでスタジオ録音のような唄うことに集中した Eric ならではの情景描写が見事な心痺れる叙情的な唄の数々。絶品。2003 作。Silverwolf)
- *THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
: One Kind Of Bait In The Bucket A
(72 年作“Out The Window”と 73 年作“Shimmy She Roll, Shimmy She Shake”の Jim Pulte がヴォーカルのハント。昨今のスワンプ系アルバムでは最もスワンプ色が濃い。ファン感動保証。2007 作。Windstorm)
- *DANNY FLOWERS: Tools For The Soul A
(本作はカントリー調、初期 Ry Cooder 調、南部ロック調そしてゴスペル調 [結構 Leon Russell っぽい] 等、どれも唄も音楽の魂に触れるもので、一曲一曲アメリカンルーツ色が濃厚で土臭くかつ泥臭い。w. Emmylou Harris, John Cowan, Steve Mackay, etc. 2007 作。Brash Music)
- *JIMMY HALL: Rendezvous With The Blues A
(Johnny Sandlin のプロデュースでアラバマ録音の Wet Willie の J. Hall の本作はティンパニクスな本仕込みブルース。David Hood, Clayton Ivey, Johnny Sandlin, Jack Pearson, Bill Stewart 等による伴奏はデルタブルース色濃厚な南部ロック。3ボーナストラック付で計 14トラック。2006 作。Rockin' Camel)
- *TOM MAY: Blue Roads, Red Wine a
(かれこれ 35 年以上のキャリアのヴェテラン SSW の T. May の本作はうたう心優しい旅人そのままに旅先の思い出の唄や友愛の唄や夢や希望の唄などがそっと優しくうたわれている。Tom のヴォーカルはそっと包み込むように優しい。ヒドゥントラックが 1 曲隠されている。ほほえみの一曲。2008 作。Waterbug)
- *DAVID MALLETT: Midnight On The Water a
(2005 年夏のライブ。“Pennsylvania Sunrise”時代を思い起こさせる唄声に感激。2006 作。North Road)
- *JACK HARDY: Noir a
(本作は主に旅先で或いは旅の記憶をこの 10 年の間に唄に書き溜めた自作の唄 12 曲をハーモニーヴォーカルとフィドルの Kate MacLeod を含む気心知れた音楽仲間 4 名の最小限のバックアップでレコーディングしたもの。2007 作。Great Divide)
- *A. J. ROACH: Revelation ¥1500
(ヴァージニアの山奥育ちで伝統音楽を聴き、若い頃古いアカペラの聖歌をうたっていたという A. J. だが、彼の唄の芯の部分でカントリーやブルース

等白人と黒人のルーツの音楽がミックスされた音楽性を保持し、伝統的聖歌やゴスペルの祈りから発した柔軟で逞しい意志のようなものが感じられる。Great!2007 作。Waterbug)

- *TINSLEY ELLIS: Moment Of Truth A
(南部ブルース・ロックの大御所登場。いやはや鳥肌立つブルース・ロックが次から次。エレキギターをかき鳴らし、大地揺らすブルース・ロックを叩き出す。全てが骨太で肉感的。w. Kevin McKendree, The Devil One, Jeff Burch, Mike Lowry, Michelle Malone。2007 作。Alligator)
- *ALASTAIR MOOCK: Fortune Street B
(SSWファンでも通好みのスル味 SSWアルバム。主に鮮やかなギターの伴奏でダミ声でうたう Alastair のざらっとした感触の唄は静かなインパクトがある。Chris Smither の“Train Home”のプロデューサー David Goodrich のプロデュースは Alasdair の個性を際立たせていて見事。Chris Smitherファンも是非。2007 作。オランダ CoraZong)
- *RAMSAY MIDWOOD
: Popular Delusions&The Madness Of Cows a
(J. J. Cale 風いぶし銀南部ロック。Produced by Don Heffington{トラムスモ}。w. Greg Leisz, Randy Weeks, Jake Labotz, David Jackson, etc. 2006 作。Farmwire)
- *DAN HICKS&THE HOT LICKS: Featuring An All-star Cast Of Friends ¥2780
(CD と DVD のセット。CD、DVD とも Dan Hicks の 60 歳誕生日お祝いコンサートのライブ。D. Hicks と縁のあるミュージシャンやシンガー総出演の素晴らしいライブ。DVD は PAL でコンサートの前のフィルムから笑わせる。至福保証。CD は全 13 曲で DVD は 2 曲多い 15 曲。2003 作。Surfdog)
- *MICHAEL DE JONG: The Great Illusion C
(フランス人 SSW {だが音楽は米国 SSW 系} の Michael {唄は英語} の本作は全曲ギターの弾き語り。一見 Bob Dylan の初期のようなシンプルなおんなのだが、心からの魂震わす唄は素晴らしい。SSW ファン必聴。2006 作。MW)
- *MICHAEL DE JONG: Last Chance Romance C
(人のロマンス等がとろけるように深く静かな空気の中で噛み締めるようにゆったりと唄われる。彼独特な独り言そして夢想の世界。2002 作。オランダ Munich)
- *STEINAR ALBRIGTSEN&TOM PACHECO: Nobodies B
(自主製作 CD-R。ウッドストックの Levon Helm スタジオで録音された 2000 年作。Tom も Steinar も激性を秘めた知的で叙事的で叙情的なヴォーカルが見事なもう一つの“Woodstock Winter”。w. Levon Helm, Rick Danko, Richard Bell, Scot Petito, Jim Weider, Happy Traum, John Sebastian, Jerry Marotta, etc. 2000 作。Tom Pacheco)
- *TONY ARATA: Such Is Life A
(CD-R。Tony はじっくり練り上げられた極上の唄を響きのいいアコースティックギターをお伴にゆったり噛み締めるように唄う。シンプルながら唄が深い。理想的 SSW アルバム。w. Dan Dugmore, Pat Alger, Lee Roy Parnell, etc. 2005 作。Little Tybee)
- *TONY ARATA: Way Back When A

(Tony の唄は嬉しくなるほど心優しく心が澄んだ唄、そして音も清々しくてスイートなカントリー・ロック調。丁寧な音作りを含め、一曲一曲に彼の温厚さと誠実さがきっちりと込められていて、心のこもった手作りな作品として全てが温かい。70年代の良質のSSWアルバムと同じ感触。2000作。Little Tybee)

- *DAVID MASSENGILL:The Return ¥1050
(倉庫の隅で発見。95作。Plump)
- *RICHARD MEYER:The Good Life! ¥1050
(倉庫の隅で発見。92作。Shanachie)
- *TOM OVANS:Tale From The Underground (Great!95作。NSR) A
- *ROD MacDONALD:A Tale Of Two Americas A
(子の親になった Rod の「唄いたいこと山ほどあり」の思いがガンガン伝わってくるフォーク・ソングの原点回帰の見事なアメリカン・フォーク。2005作。Wild River)
- *MARK ERELLI:Hillbilly Pigrim A
(M. Erelli の本作は古きカントリー・ミュージック回帰。Mark のカントリーは懐古趣味を超えて、今の新しいアメリカの音楽としての勢いがある。音楽スタイルは古い音楽新鮮野菜。ゲスト:Erin McKeown。2005作。Signature)
- *JEFF WILKINSON:Landscapes C
(見聞きした不思議な光景や事件等をざっらとした感触の土臭いサウンドでどっぷり自分のペースで唄う。一曲一曲の自作の唄がタイトル通り Jeff の見聞きし、感じた「風景」のように唄として収まっている。全てが Jeff の時間の流れなのがいい。Brambus)
- *BART DAVENPORT:Maroon Cocoon a
(子供の頃、ヒットだった両親のレコード・コレクションを聴き漁ったという彼だが、音楽性は70年代の夢想的なブリティッシュ・フォークあるいはソフト・ロックの感触で輝くギターを爪弾き、夢見心地な唄をゆったり描くように唄う。2005作。Antenna Farm)
- *RAY WYLIE HUBBARD>Last Train Of Thought (95作。Deja) A
- *DAVID BALL:Freewheeler A
(タイトル曲は Jesse Winchester のナンバーだが、このカントリー系SSWのD. Ballの本作はヴォーカルといいサウンドといいカントリー度が深い。ヴォーカルもサウンドも泥臭くエッジアップ。w. Mike Johnson, Kenny Malone, Milton Sledge, Dan Friszell, etc. 2004作。Acan)
- *FRED KOLLER:No Song Left To Sell A
(どっしりとしたSSWアルバムの傑作。Shel Silversteinとの共作集で全14曲。2001作。Gadfly)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes A
(Kerrville Folk Festival のライヴ。2003作。Silverwolf)
- *J. T. VAN ZANDT:WRECKS BELL B
:Live At The Old Quarter Acoustic Cafe
(マックス・ヴァン・ザントの息子 J. T. が8曲と Wrecks Bell が9曲の全17曲入ライヴ。2004作。Romeo)
- *THE WOODYYS:Teardrops&Diamonds A
(Byrds~Every Brothers~Gram Parsons 的全アメリカン・ミュージック・ファンの琴線に触れる懐古&郷愁ムードとロックする快樂さと恋する思い等が

チャールに表出したほんわか気持ちのいいカントリー・ロック。w. Al Perkins, Dave Pomeroy, Cam King, Tammy Rogers, Steve Conn, Billy Block, etc. 2001 作。Dynamike)

- *CELEBRATION! "Highlights From The 40th Philadelphia Folk Festival" A
(2001 年 8 月 24~26 日に開かれたフェスのライブ。全 13 曲。出演者は収録順に Arlo Guthrie, Laura Love Band, Sonia, Solas, David Bromberg, Janis Ian, Richie Havens [All Along The Watchtower], Tom Paxton & Anne Hills, Chris Smither, Jimmy Johnson, Laurie Lewis, Tom Rush [Driving Wheel!], Judy Collins。2002 作。Sliced Bread)
- *RECKLESS JOHNNY WALES: It's Not About The Money A
(ユーエフ、皮肉、悲哀など人生のひきこもごもをペーソス漂う唄でうたう凄く個性的で魅力的な SSW。Randy Newman に似てるが、Reckless の方が音楽的に開放感があって豊か。w. Jeff "Skunk" Baxter, Clive Gregson, Dave Pomeroy, Brian Willoughby, Cathryn Craig, Pat McInerney, Michael Snow, etc. 2003 作。Villa Villa Music)
- *SAYLOR WHITE: Graven Image B
(風貌は Willie Nelson 風。ヴォーカルは Jerry Jeff 風。どことなく時代遅れなおっとりした唄と土臭いサウンドはほのぼのとさせ、またしみじみといい気分させる。ひと言ひと言思い出に浸り、2003 作。Last Call)
- *BILLY JOE SHAVER: Freedom Child A
(オールタイム・ファイリングな Billy Joe の本作は自身のルーツ回帰の懐古趣味的な一方で、古いカントリーやブルース調の節での Billy のヴォーカルは古臭くも輝いている。2003 作。Compadre)
- *DAVE SCHRAMN: Hammer And Nail ¥1980
(内省的 SSW アルバムの傑作。99 作。ドイツ Blue Rose)
- *SHAWN SAHM: Shawn Sahn A
(Doug Sahn の息子 Shawn の Doug Sahn そっくり? なソニマリの本作。すっかりサー・ダグ・ラス・クインテット風なテキサス・メックスとハスキーで甘い Shawn のヴォーカルは理想のテキサス音楽を体現。ゲスト: Doug Sahn, Augie Meyers, Flaco Jimenez。2002 作。イギリス Evangeline)
- *PONTY BONE: Fantasize A
(テキサスのドクター・ジョンとでも言うか、縦揺れ、横揺れたつぶりリスミカル。Ponty のおおらかな太いヴォーカルもいい、いい。ようこそ! ミラクルな Ponty Bone のテキサス・メックス・ショーの世界へ。2002 作。Loudhouse)
- *DON WILLIAMS: Silver Turns To Gold A
(いわば心の名曲集。SSWファン向けのいい唄ばかり。終始心和む。w. Sam Bush, Kenny Malone, Tim Williams, Charles Cochran, etc. 2002 作。RMG)
- *DON MICHAEL SAMPSON: Old Wood Bridge A
(2 枚組 CD-R。あの "Americansongs" の Don の悠々自適の自主制作盤。各種愛用ギターのアタックの強い巧みなギターを伴奏にした Don の唄は彼のキャリアがしっかりと熟成されたしたたかだしなやかなもの。2001 作。Red Rose)

- *JEFF TARLTON:Astral Years a
 (米国人 SSW だが資質は英国人 SSW 的。90 年代初めに故郷を離れ、録音時はベルリンでストリート・ミュージシャン。マンコリックで宇宙的音楽は Nick Drake や Tim Buckley を思い出させる。全 20 曲の長い旅。97 作。Delerium)
- *JEFF TARLTON:Dragin Spring a
 (前作の延長線上の 2 枚目。少し型にはまった分音樂的。やはり夢の異次元の世界へ。ベルリンでの録音。2000 作。Delerium)
- *TONY JOE WHITE:One Hot July A
 (スワンプな煮込み味。T. J. White ここに在り!2000 作。Hip-0)
- *ALAN GERBER:The Boogie Man A
 (スワンプ・ロック・ファン感涙のタフなスワンプ・ロック。99 作。Mugwamp)
- *CALVIN RUSSELL:Crossroad B
 (ギター弾き語りライブ。ごっつい唄が全 16 曲。“想い”が乗り移った粗いギターと“想い”がこぼれんばかりの入魂の唄に釘づけ。2000 作。Last Call)
- *CALVIN RUSSELL:Sam B
 (テキサスのグエテランSSW の 8 枚目。プロデューサーが James Luther Dickinson で、バックには Roger Hawkins, David Hood, Brenda Patterson の面々。ロングセラー。99 作。Last Call)
- *TOM ROZNOWSKI:Voice Beyond The Hill A
 (T. Roznowski の温厚な人柄が滲み出た心優しい SSWアルバム。70 年代っぽい味と心あるカントリー・ロックが Tom の持ち味を最高に高めている。w. Jon Randall, Rob Ickles, James Talley, Brent Truit, Richard McLaurin, etc. おやし感涙保証。2001 作。Blazing Stump)
- *HUNTER MOORE:Conversations B
 (ナッシュヴィルの SSW, H. Moore の本作は Chris Donohue [バース], Phil Madeira [エレクトリックギター]、Steve Hindalong [バッキング] の小編成ながらリリッドかつタイトなルーツ・ロック。Hunter の乾いた粗野なヴォーカルか何とも言えず魅力。2001 作。Brambus)
- *HUNTER MOORE:Delta Moon B
 (その昔のベストセラー。やや南部寄りかつ繊細さも持ち合わせた本作は今聴いても新鮮。SSW 名盤。w. Kenny Malone, Bob Wray, Russ Pahl, etc. 96 作。Brambus)
- *JERRY JEFF WALKER:Mr. Bojungles C
 (2 曲のボーナス・トラック付の計 12 曲入。68/93 作。Rhino)
- *TAJ MAHAL&THE HULA BLUES BAND:Hanapepe Dream B
 (西アフリカのお次はハワイ!?Taj の渋いヴォーカルもバンドの音楽もユルユルで心地よいロール感があって、ご機嫌。Taj の各種ギターはもちろんのことウクレレやスティール・ギターも最高の響き。夢心地保証。2001 作。ドット&M)
- *MAIN STAGE LIVE "Falcon Ridge Folk Festival" A
 (Kennedys, Dar Williams, Greg Brown, Richard Shindell, Nields, Patty Larkin, Peter Mulvey, Vance Gilbert and more。全 14 曲。99 作。Signature)
- *TOM MITCHELL:When The Moon Is Right ¥1000
 (時折、Bob Carpenter をホフさせる世界をも垣間見せる。SSWファン静かなる衝撃作。96 作。Truesongs)

- *ELLIOTT MURPHY・IAIN MATTHEWS:La Terre Commune A
 (異色のデュオ。それぞれのソノの持ち味とデュエットがバランスよく収められた友情盤。2001作。ドゥイツBlue Rose)
- *CHRIS SMITHER:Live As I'll Ever Be B
 (何も言うことなし、C. Smither の持ち味そのままが発揮されたギター弾き語りライブ。録音は96-99年。全16曲。Hightone)
- *DAVID MUNYON:Acrylic Teepees B
 (いつも夢想的で透明なD. Munyon の唄の世界。w. Al Perkins, Dave Pomeroy, Craig Krampf。珠玉の逸品。96作。Glitterhouse)
- *DAVID MUNYON:Slip Possibility B
 (ある種神聖とも形容できるD. Munyon 独特な唄の世界だ。非の打ち所のない潔癖さだ。理想のSSWアルバム。96作。Stockfish)
- *JEB LOY NICHOLS:Just What Time It Is a
 (ベアーズゲイル録音の傑作“Lovers Knot”に次ぐ待望のNew。しばし南部&トピカル・フィリングのある本作に夢心地…。知性と感性と職人気と三拍子揃った傑作。2000作。Rough Trade)
- *JERRY JEFF WALKER:Night After Night D
- *BUTCH HANCOCK・JIMMIE DALE GILMORE:Two Roads a
- *MARK STUART:Songs From A Corner Stage(1999作。Gearle) a

[CD/USA {female}]

- *MASTERSONS:Transient Lullaby A
 (Mastersons は Eleanor Whitmore {ヴォーカル、ヴァイオリン他} と Chris Masterson {ヴォーカル、各種ギター他} の夫婦デュオ。Steve Earle のバンドの The Dukers のメンバーでもあるらしい。夫婦ともルーツ系SSW として魅力的な上に、デュオとしても、Pacheco&Alexander や Hardin&Russell など数ある男女シンガー二人組のアルバムの中でも、Chris&Eleanor のヴォーカル・デュエットは、音作りにこだわりを持つ Red House ならではの、土臭くって旨みたっぷりなルーツ・ロック・サウンドにまみれていて、最高級の味わいを味わわせてくれるとびっきりのアルバムになっている。変な話だが、二曲目のアルバム・タイトル曲は、スティール・ギターのサウンドが輝く、豊穣なアメリカン・ロックなのだが、デュエットから立ち上る感触は、なぜか Gay&Terry Woods の感触。よく聴けば、エレキギターの音色がややブリティッシュ・フォークがかかってるような。ルーツ志向音楽の奥が深くて味わいが深い。2017作。Red House)
- *CHASTITY BROWN:Silhouette Of Sirens A
 (全曲 Chastity の自作曲で二曲以外は彼女のプロデュース。何と言う才能だろう。比較出来るSSW が思いつかないほど、ゴスペルの匂いを内に秘めたじわりじわりと聴き手を誘引するヴォーカルは、個性豊かで、独特な唄の世界を創り出している。おまけに聞いたことのないミュージシャンばかりで固めたバンドの大胆かつ細やかなルーツロックは、Chastity の唄と一体化して滅茶苦茶かつこいい。今回のバンド編成の本作も抜群だが、ギターの弾き語りでも、かなり聴かせそうな魅力を彼女の魂が宿った唄が放っている。10年に一人の逸材。Unbelievable!!!2017作。Red House)

- *SHANNON McNALLY:Black Irish A
 (“Black Irish”というタイトルだが、音楽はアイリッシュとは無縁のやや南部志向の女性 SSW タイプの音楽。70 年代の米国 SSW&ロックを体験してきた連中が「夢をもう一度」との思いで、集中力を上げてバックアップしたのが本作。シンガー Shannon の音楽的資質に最も近いのは Bonnie Raitt。そんな米国南部&ルーツ志向の生え抜きのシンガー Shannon の唄とその資質に見合った旨みたっぷりな土臭い音楽は、この手では最上級。J. J. Cale の“Low Rider”に Emmylou Harris の Prayer In Open D”に Susanna&Guy Clark の “Black Haired Boy” [T. V. Zandt のことをうたった唄]に The Band の “It Makes No Fifference”などの美味しすぎる名曲の数々を Shannon は堂々とうたい通す。w. Rodney Crowell {プロデューサーでもある}, Colin Linden, Emmylou Harris, Elizabeth Cooke, Byron House, Jim Hoke, Michael Rhodes, etc. 完璧というか出来過ぎ。2017 作。Compass)
- *EMILY ARROW;Storytime Singalong Vol. 2 A
 (早くも Vol. 2!!!聴くく前からワクワク。彼女の絵本からイメージして作詞作曲した唄と音楽は、前作同様に小春日和で胸キュンな素敵な唄とカラフルな音楽で弾けていて、絵本の世界をルンルン遊ぶ感じ。新たにタグを組むプロデューサーの Cazz Brindis のギターやピアノやドラムスや木琴や口笛や不明楽器などの楽器の操り方もルンルン・サウンドで、音を聴いてるだけでもハッピーハッピー！歌詞にも出てくるが、“Everybody smiles”な一枚。ご家族でお楽しみ下さい。2017 作。Emily Arrow)
- *BANKESTERS:Nightbird A
 (Alysha {マントリン、フィドル}, Emily {フィドル、バングォー}, Melissa {ベース} の三姉妹シンガーのソロとハーモニーをフィーチャーし、父の Phil {ギター} と Melissa のご主人の Kyle {バングォー、ギター} が三姉妹の魅惑の唄の縁の下の力持ち役で共演した Bankester ファミリーの 6 枚目。2017 作。Compass)
- *LAURA CANTRELL:Kitty Wells Dresses B
 (Laura の 4 枚目に当たる本作は、Laura が子供の頃からのファンというカントリー・シンガーの Kitty Wells のカバー集。スティール・ギターを含めたカントリー・サウンドの全てがハイ音楽のような清涼感があって、清々しい。2011 作。Shoeshine)
- *BETSE ELLISE:High Moon Order A
 (The Wilders のヴォーカル、フィドルの Betse のソロ。13 曲中 7 曲が自作曲で 3 曲が伝統曲。彼女のフィドル演奏はザーク・スタイルのオール・タイム・フィドルだそうで、僕の耳には John Hartford の女性版のように聞こえる。今の世の中にこんな音楽あり?!とってしまうほど、ホームメイドな古臭くて、飄々とした唄と音楽だ。2013 作。Tree Dirt)
- *ALICE GERRARD:Bittersweet A
 (かれこれ 40 年以上にわたって、アメリカン・ルーツ音楽の第一線で活動してきた Alice の 10 年ぶりの本作は、全曲自作曲の深い味わいのある素晴らしい SSW/フォーク・アルバム。体の中から湧き上がるようなリラックスした唄は、いぶし銀のアメリカン・ルーツ・サウンドを伴って、ある時は心に沁み、ま

たある時は心を和らげ、またある時は心をほがらかにさせる。いぶし銀のアメリカ・ルーツ音楽の名品だ。w. Laurie Lewis, Stuart Duncan, Bob Ickes, Bryan Sutton, Todd Phillips, Tom Rozum, etc.

2013 作。Sprouce And Maple Music)

*CATHRYN CRAIG & BRIAN WILLOUGHBY:Real World a
(ナッシュビルの女性 SSW の C. Craig とブリティッシュ・フォーク・グループのストロブスのギター奏者の Brian Willoughby のデュオによる本作は、Brian の美しいブリティッシュ・フォーク・ギターと Cathryn の大人のメルヘン調の穏やかな唄とが何とも心地よい“Real World”ではなく、“Dreamy World”。ずっと聴いていたい気分。2013 作。Cabritunes)

*ANNIE KEATING:Water Tower View a
(ひと味違う凝ったルーツ・ロックは本醸造ルーツ・ロック・ファンを唸らせる。こんなにセクスの良いかしたルーツ・ロックは滅多にお耳にかかれない。Annie の唄は、セクス抜群の大人のルーツ・ロック・サウンドと共に心と体に美味しい。w. Bo Ramsey, Jason Mercer, Chris Benelli, Chris Tarrow, John Caban, etc. 2010 作。Annie Keating)

*COSY SHERIDAN:The Horse King a
(ヴァンペーン女性 SSW の Cosy の本作はひと味違う。様々なサウンドを創り出すアコースティック・ギターの妙技に驚かせられながら、Cosy の唄の世界へとご機嫌に誘われてゆく。音楽性の基本は Good & Old Time なアメリカ・ミュージック。巧みなワザに裏打ちされた音楽は豊かで柔らか。心晴れ晴れする爽快な SSW アルバムだ。w. David Surette, Kent Allyn, Penny Nichols, TR Ritchie. 2011 作。Waterbug)

*CAROLINE HERRING:Camilla A
(Caroline の音楽性はフォーク/ルーツ・ロック系だが、その中身は自分の物語を含めて、アメリカの物語。Lucinda Williams 級。ゲスト:Jackie Oates, Mary Chapin Carpenter, Aoife O'Donovan, Kathryn Roberts. 最後の曲はハート・ハーツの「蛍の光」だが、Caroline は自作のメロディに乗せてうたっている。2012 作。Signature Sound)

*JANIVA MAGNESS:Stronger For It A
(Janiva の渾身の唄とバンドの南部ロックが、ガツと組み合って、感動の嵐。2012 作。Alligator)

*FRED JAMES & MARY-ANN BRANDON:We Belong Together a
(ナッシュビルのヴァンペーン SSW & キタリストの Fred James とナッシュビルのスワンプ・クインの Mary-Ann の共演盤。Fred の SSW 的資質と Mary-Ann の南部ブルース&R&B 資質のぶつかり合いは Fred が Mary-Ann の大きな土俵の上で、自身のエレキ・ギターを含め、ガツあるヴォーカルで精一杯対抗する風ながら、Fred は+αの南部っぽい底力を見せ付けている。Mary-Ann のヴォーカルは豊潤なヴォーカルで聴き手を圧倒する。2011 作。ド・イツSPV)

*WHEN OCTOBER GOES(1991 作。Philo) A

*NANCI GRIFFITH:Little Love Affairs(1988 作。MCA) A

*NANCI GRIFFITH:Flyer(1994 作。Elektra) A

*REBECCA PRONSKY:Viewfinder A

(ブルックリンの女性 SSW の Rebecca の唄は独特。音楽的には Gillian Welch や Eilen Jewell のような古いルーツ・フォークやルーツ・ロック的な志向性

を持ちつつ、トゥワニング・ギターの多用に加え、声が豊かで、夢想的で朗々としたヴォーカルなど、彼女独特な唄世界を創作している。都会のビルの一室で、夢想しているかのような音楽。2011 作。Nine Mile)

- *LIZ MEYER: The Storm A
(カントリー・フォークの女王 Liz の本作は昔からの音楽仲間や中堅音楽家の協力を得て実現した夢に描いてきた同窓会音楽。Bela Fleck, Emmylou Harris, Jerry Douglas, Sam Bush, Stuart Duncan, Rob Ickes, Byron House, Glen Duncan, Ron Block, Kenny Malone 他。2005 作。アルバム Strictly Country)
- *CARRIE RODRIGUEZ: She Ain't Me A
(Chip Taylor とデュオを組んでいた Carrie の二枚目。本作でデュエットする Lucinda Williams 級。2009 作。Continental Song City)
- *KRISTA DETOR: Chocolate Paper Suites a
(前二作同様、プロデュースは David Weber で、そしてまた前作同様、自身が奏でるピアノの響きが印象的で、時空を超えて、Krista が創作する穏やかで、深く心地よい唄の世界へと運ぶ。Chris Wood, Karine Polwart, Emily Smith, Maura Smiley, Rachel McShane, Malcolm Dalglish, etc. 2010 作。CoraZong)
- *RACHEL HARRINGTON: The Bootlegge's Daughter A
(2008 年作の "City Of Refuge" が好評の Rachel の 2007 年作のデビュー作。Rachel の唄を包む空気は百年前のアメリカ西部、或いはアラバマだったり、今日のルーツ・ロック風だったり、また今日の田舎の SSW 風だったりする。2007 作。Skinnydennis)
- *LINDA HARGROVE: One Woman's Life A
(カントリー・フォーク系のヴァンサンSSW の Linda の本作はヴォーカルも音作りもヴァンサンの風格漂う Great な SSW アルバム。名うての楽士達のバックアップが見事。Linda の揺るぎ無い唄に相応しい演奏で支える楽士は Sam Bush, Kenny Malone, Jeff Davis, Dennis Burnside, Pam Rose, Hoot Hester, etc. 2005 作。Panacea Productions)
- *KATE McDONNELL: Where The Mangoes Are B
(Kate の本作が 4 枚目。Kate ならではの壊れそうで逞しい唄たちだ。Kate は今を唄う吟遊詩人。2005 作。Appleseed)
- *SUZANNA SPRING: She's Got Your Heart A
(本作は敏腕プレイヤーによる奥深くもピリっとかっこいいルーツ・ロックの見事さ中で女性ならではの哀愁や感傷や夢想等の感情が実にいい感じで美味な唄として結実している。かっこいい音の波に乗ってる、って感じだ。2003 作。Suzanna Spring)
- *CLARE MULDAUR: Bentley Circle ¥700
(Geoff&Maria の娘 Clare の 2 枚目。Clare の夢見るような素朴な唄の数々とこれまた夢見るような素朴なギター、チャリンコ、マティカ等の伴奏の音色の心地よさは憎いほどの素敵さ。2003 作。Clare Muldaur)
- *WENDY BECKERMAN: Mango Moon A
(Jack Hardy おかかえのミュージシャンがバックを固めた Wendy の 3 枚目の 96 年作。Wendy の持ち味がシンプルにリカルに表出。唄の自由さと彩りのある素敵な女性 SSW アルバム。Brambus)
- *FLORAMAY HOLLIDAY: Floramay Holliday B

(南キヤロライの女性 SSW。Kelly Willis と比較されることの多い SSW だが、Floramay の方がロック的で南部志向。エネルギ-を内にキープした本格的ヴォーカルをテキサスのヴェテラン達が本醸造ロックでサポート。w. Lloyd Maines, John Inmon, Gene Elders, etc. 98 作。Roseneath Music)

- *ROSALIE SORRELS: No Closing Chord a
(Malvina Reynolds ソング集。w. Bonnie Raitt, Laurie Lewis, Nina Gerber, Barbara Higbie, etc. 2000 作。Red House)
- *PEGGY SEEGER: Love Will... Linger On... a
(副題“Romantic Love Songs”。子守唄のように夢心地な唄達。
w. Colum & Neill MacColl, Irene Scott, etc. 2000 作。Appleseed)
- *KIM RICHEY: Bitter Sweet (97 作。Mercury) A
- *MARIA MULDAUR: Meet Me At Midnight (1994 作。Black Top) A

[DVD/CANADA] PAL 2

※PAL 専用 DVD プレーヤー/パソコンで再生可能

- *NEIL YOUNG: Heart Of Gold D
(2 枚組。ディスク 1 はドキュメンタリー+ライブ 1 曲で、ディスク 2 は 2005 年ナッシュビルでのライブ。全 19 曲。w. Emmylou Harris, Ben Keith, Spooner Oldham, Karl Himmel, Chad Cromwell, etc. ディスク 2 のライブは一曲一曲が聴き所、見所。2005 年。オランダ。Shangri-la)

[DVD/CANADA] NTSC all regions

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *LEONARD COHEN: Under Review 1978 - 2006 B
(カガを代表する SSW の L. Cohen の多数の希少ライブ映像を含む貴重映像と写真を挟みながら John Simon, John Lissauer, David Cohen 等 L. Cohen のプロデューサーやジャーナリストがアルバムを追いながら彼の音楽を語るドキュメンタリー-DVD。64 分。2008 作。Sexy International)
- *RONNIE HAWKINS: Still Alive And Kickin' B
(The Band の前身 The Hawks のリーダーでカガのロック界のホ-スの Ronnie Hawkins の Hawks 時代の貴重ライブ映像や今日のバンドのライブを挟みながら、癌の手術そして快復等 R. Hawkins の普段着の姿と音楽人生が記録された DVD。Robbie Robertson, Kris Kristofferson, クリントン元大統領が R. Hawkins を語る。約 90 分。2004 作。CTV)

[CD/CANADA]

- *GOOD LOVELIES: Under The Mistletoe B
(Caroline Brooks, Kerri Ough, Sue Passmore の女性ヴォーカル・トリオの Good Lovelies の新作はクリスマス・アルバム。これはすっかり Good Lovelies 流に古き良き米国音楽のムードに彩られたクリスマス・ソングの数々は、ほわっと夢見心地。彼女達のオールドタイムーで、スウィングーで、ポップで、ちょいひねりのあるスウィート・ハーモニーは、戦後米国が豊かだった時代の懐かしのポピュラー・ミュージックを聴くようなノスタルジックさを醸し出している。米国の一般市民{お年寄り}もニコニコなクリスマス・アルバム。2016 作。Good Lovelies)

- *BLUE RODEO:1000 Arms B
 (1984年結成のカナダのヴェテラン・カントリー・ロック・バンドのBlue Rodeoの新作は、西海岸カントリー・ロックの王道を突き進む信じられないほど爽快なカントリー・ロック。現在のメンバーはGreg Keelor {ウォーカ、ギター}、Jim Cuddy {ウォーカ、ギター}、Bazil {ベース}のオリジナル・メンバーにGlenn Milchem {ドラムス}、Michael Boguski {キーボード}、Colin Cripps {ギター、ウォーカ}の六太郎。PocoとByrdsの美味しいところを清々しく受け継いでいて、感涙。彼ら、音楽で青春してますね。2016作。TeleSoul)
- *BLACKIE AND THE RODEO KINGS:South A
 (Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson, John Dymond, Gary CraigのBlackie&The Rodeoの2014年のアルバム。Willie P Bennettを愛するツワモノ達の一時的なバンドかと思っていたら、今年結成20周年で、本作は8枚目。フォーク系のS. Fearing, カントリー&南部系のT. Wilson, 南部系のC. LindenのそれぞれのSSWがこのバンドのために自作曲を持ち寄って、それぞれの個性を活かした年季の入ったルーツロックを創作しているのだが、特にWillie Pの資質に似た持ち味のT. Wilsonと南部志向のC. Lindenの二人がリード・ヴォーカルを担う曲の土臭さや泥臭さは、Willie P + αの味わいを醸し出していて、圧巻。2014作。FU:M)
- *BLACKIE&THE RODEO KING:High Or Hurtin' B
 (Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilsonから成る"Blackie"の1996作。True North)
- *BROOKE MILLER:Familiar D
 (Super Audio CD。プリンスエドワード島育ちの女性SSWでギタリストのBrooke Millerは、Bruce Cockburnの緻密さとJoni Mitchellの繊細さを併せ持つカナディアンSSWらしいアーティスト。カナダのかがのSSWアルバムとして完璧。ギター・ファンも唸るよ。2012作。Stockfisch)
- *STEPHEN FEARING:That's How I Walk B
 (最強のSSW。S. FearingのNewは、朋友Colin Lindenの強力応援を得、Stephenの感性鋭いシャープな唄が、より深みと味わいをもって心に突き刺さる。w. Colin Linden, Richard Bell, Shawn Colvin, Jonelle Mosser, Ben Riley, etc. 2002作。True North)
- *RICHARD NEVILLE:Old Souls A
 (Richard Nevilleはカナダ東部のラブラドル半島のSSW。ラブラドル半島の人々や文化に触発された自作の唄の数々は、ほっこりしていて、古くからの友の唄を聴くように体にしみわたる。例えば、田舎暮らしをしていて、穏やかになったGordon Lightfootのようなメロディの唄。自身のギターの弾き語り+軽やかなカントリー・ロック風サウンドは、彼の温厚な唄とともに何とも心地よい。SingSong)
- *BONNIE DOBSON:Take Me For A Walk In The Morning Dew A
 (Bonnie Dobsonの2014作。録音は英国のロンドン。Her Boysと名付けたグループ {B. J. Coleもメンバー}を伴って制作された本作は、衰えを知らぬ歌声と決して懐古趣味的ではないリットなアコースティック・フォーク〜フォーク・ロックに現在進行形の今のBonnieの音楽が瑞々しく表出さ

れている。12曲目の“Sandy Boys”などはFairportみたいな気力充実のフォーク・ロック。2014作。Hornbeam)

- *ANNE JANELLE: So Long At The Fair A
(カガのフォーク・ミュージック賞受賞のJames Hill&Anne JanelleのAnneの二枚目。Anneの音楽的才能は並外れている。一曲目では、ケック・トラッドのタップ・ダンスのリズムを伴奏にトラッドの名曲“Black Is The Colour”をAnneは自身のヴォイスを重ね録りして、女性トリオのアカペラ風音楽で驚かせたかと思えば、ユーモア感覚あるノスタルジック・ムードの音楽や古いスタンダード・ジャズ・ムードの音楽や古いカントリー・ムードの音楽や古楽ムードの音楽などで、あの手この手でゆったりとくつつろがせる。カガにはなぜか古い音楽をベースにした多才な女性フォーク系シンガーが多い。2013作。Anne Janelle)
- *IAN TAMBLYN: Side By Each B
(海の生き物に心を寄せ、旅の思い出を回想するIanの心の唄は、本作において、一段と穏やか。ギター美しい響きなど、ふと“High Winds White Sky”の頃のBruce Cockburnを思い出した。w. Rebecca Campbell [彼女のほわっとしたハーモニー・ヴォーカルはIanの音楽に欠かせなくなっている], Fred Guignon, Pat Maher。2013作。North Track)
- *IAN TAMBLYN: Gyre B
(「四つの海岸プロジェクト」は一休み。地球を旅するIanのその感動の瞬間の心情が一枚の印象的な風景写真のように詩的に詠まれ、うたわれている。本作はW. G. Tamblyn [1923-2009], Willie P. Bennett [1951-2008], M/S Explorer [1968-2007]の霊に捧げられている。評価する隙を与えない名作。2009作。North Track)
- *IAN TAMBLYN: Superior – Spirit And Light B
(本作は四つの海岸プロジェクトの1作目で、I. Tamblynが育ったところであり、音楽の旅のスタート地のスペリオル湖と北西のトリオに焦点を当てたもの。本作は青春時代を過ごした湖の生活に想いを馳せ、心遊ばせた唄たちが収められている。煌くギターの演奏ほか生まれた音楽は細心の音作りが成され、Ianのまさに“Spirit and Light”に象徴される魂が乗り移った唄はかつてなくと言っても過言ではない程彼らしいヒューマニティーと詩情を高めている。2007作。North Track)
- *IAN TAMBLYN: Angel's Share B
(Ian Tamblynらしい素晴らしいアルバム。旅するSSWのIanの目に映る世界はどれも霊的なほど美しく神秘的に輝いている。感動的な風景や旅の出来事の詩的描写の見事さは本作においてもなお絶品。w. Rodney Brown, Rebecca Campbell, Ken Kanwisher, Fred Guignon, etc. 2004作。North Track)
- *JENN GRANT: The Beautiful Wild A
(カガの女性SSW, Jennの4枚目。米国の女性SSWのMeg Christianのようなゆったりと漂うような唄なのだが、Jennは深いポップ・ロック・サウンド効果もあって、奥が深い。またイントロから始まり、Neil Youngの「孤独の旅路」っぽい2曲目から夢の旅路へと誘って、ラストの12曲目、子ども達の唄で終わったかと思っていると、しばらくしてJennのピアノの弾き語りという展開は長い夢の唄の旅をした気分

- させる。プロデュースは Daniel Ledwell。2013 作。Blue Rose)
- *AMELIA CURRAN: Spectators A
 (Amelia は絶望や寂しさの中から光を求めるような唄が多く、唄から漂う雰囲気は Natalie Merchant を想起させる。闇の中で「キラ」の素敵な唄たちだ。どこかで 70 年代 SSW のスピリットを引きずっている感じだ。ゲスト: Oh Susanna。2013 作。Blue Rose)
- *OLD MAN LUEDECKE: Tender Is The Night A
 (ここ数年で最高にお気に入りのかがの SSW。この自ら「老人」と名づけたパツォー弾き SSW のおっさんが住む世界は、唄の世界も音楽的にも田舎っぽい、同時に夢のような世界。その夢のような世界がもう最高。なぜか Tim O'Brien がプロデュースをやっていて、様々な楽器と唄で、まるで長年の相棒のようにわきあいあいと共演している。本当に魅力的な SSW だ。2012 作。True North)
- *DAVID FRANCEY: Live From Folk Alley A
 (2005 年 11 月、Kent State Folk Festival でのライブ。伴奏は Shane Simpson のギターのみ。David の唄の世界は流れる風景や絵本を眺めているように映像的だ。最後から 2 曲目の“Morning Train”は、キリスト、ブッダ、アラーと駅や列車内で出会う唄だ。最後に出会うのは悪魔。発想が面白く、実に面白い唄だ。全曲訳詩が欲しいところ。素晴らしい唄と一緒にフェスの空気も味わって欲しい。2012 作。Greentrax)
- *MURRAY McLAUCHLAN: Swinging On A Star (1988 作。カナダ EMI) B
- *MURRAY McLAUCHLAN: The Songbook... New Arrivals a
 (M. McLaughlan の本作は“Eddie”というミュージカルの為に Murray が作詞作曲した 14 曲入。Murray の唄は古いジャズやポピュラーソングを唄うようにソフトでノスタルジックで粋なサウンドにのってうたう Murray の唄は気持ちいい。2006 作。EMI)
- *LUNCH AT ALLEN'S: More Lunch At Allen's B
 (Lunch At Allen's はトロントにある Allen's Pub&Restaurant で Murray McLaughlan が旧友の Marc Jordan と Ian Thomas を誘ってスタートさせたグループで、後に Cindy Church を誘って活動を継続してるライブ専門のヴォーカルグループ。2010 作。Linus)
- *RAY BONNEVILLE: Bad Man's Blood a
 (南部ロック志向 SSW の R. Bonneville の新作は南部魂を内にしっかりと込めた泥臭い南部志向音楽。好きものには贅沢な料理だ。噛むごとに舌鼓保証。Ray の最高傑作。2011 作。Red House)
- *WAYNE ROSTAD: Storyteller (1991 作。Stag Creek) C
- *DAVID WIFFEN: South Of Somewhere (1999 作。True North) C
- *MAE MOORE: Folklore A
 (かがの自然や大地の自然現象や風景を入口に夢物語の世界へと誘うかが人のセンスが微細に発揮された見事な女性 SSW アルバムだ。Mae の唄はどの唄も自然や大地を描いた不思議な絵のよう。すぐにイメージするのはやはり Joni Mitchell。Mae の音楽性は丁度 Joni Mitchell の初期からジャズっぽい“Court And Spark”までの幅でキラと光るサウンドと唄とで魅了する。かがの SSW の感性が光る名盤だ。2010 作。Poetical)
- *DEVON SPROULE: Don't Hurry For Heaven! A

- (かが 生まれの米国が アーゾニア州の 100 人のコミュニティで育った Devon の本作は 60 年代～70 年代ロックの感触の諧謔的音楽を含め子悪魔的魅力全開。2010 作。Black Hen Music)
- *DEVON SPROULE:Upstate Songs A
(2003 年作。アコースティック演奏による軽やかにひるがえるヴォーカルの少女っぽさと新鮮さそして夢見心地さはすこぶる魅力。胸キュン。2003 作。Tin Angel)
- *JOHN WORT HANNAM:Queen's Hotel A
(本作が四枚目というかがの SSW の J. W. Hannam の第一印象は Rodney Brown。ヴォーカルの質も似ているが、Rodney のようにマイペースで、温厚で、どこか爽やかな風が吹いているような感じも似ている。違うのはこちらの方がやや渋めというか、一歩引いた大人の哀感も感じられることだろうか。さりげなさがとても快い良質の SSW アルバムだ。w. Steve Dawson, John Reischman, Jenny Whiteley, etc. 2009 作。Black Hen Music)
- *COLIN LINDEN:Sad&Beautiful World 1975-1999 A
(The Band 系南部ロックに深く傾倒する C. Linden の初期音源中心の 18 曲入編集 CD。2004 作。True North)
- *GREAT LAKE SWIMMERS:Lost Channels a
(カントリー・ロック・ファン大推薦。かれらの音楽は 70 年代ロックに夢のヴォーカルを掛けた感じで、70 年代ロック・ファンの弱い部分をくすぐる夢の音世界を創作し切っている。天下一品。2009 作。イギリス Netzwerk)
- *FRED EAGLESMITH:Dusty A
(Fred の本作は何と言うか鎮魂歌のように物悲しく緩やかに流れてく。祈るような Fred のヴォーカルはじわりじわりと感動的。Scott Merritt のプロデュースはこれまでの Fred のルーツ・ロック的音作りとは一線を画した自由な発想による唄のイメージに即したものの。絶品！ Major Label)
- *VEDA HILLE:This Riot Life A
(通算 12 枚目になる個性的 SSW の Veda の本作は不思議音楽。ピアノで音遊びしながら生まれたような彼女の唄は独り夢の中を旅する感覚の音楽。2008 作。Ape House)
- *VALDY & GARY FJELLGARD:Still In The Running A
(副題"Contenders Two"。まさかの二人の嬉しい 2 枚目。齢を重ねたじいさん SSW お二人の温かな唄達。昔っから好きな Valdy のヴォーカルは相変わらず。Ian Tamblyn の"Bay Of Sails"や John Prine の"Speed Of The Sound Of Loneliness"や Micky Newbury の"Them Old Snogs"等二人それぞれがヴォーカル&デュエットで人なつっこそうな唄を二人の活きの良いギターとマンドリンの伴奏でうたう。ヒューマン・ソング・ファン、心あったか保証。2007 作。Stony Plain)
- *TIM WILLIAMS:Songster, Musicianer, Music Physicianer A
(ホトネック・ギター等ブルース・ギターを弾き年季の入ったブルースやブルース風自作曲を悠々とうたう。長年活動を共にしているバンドが数曲で共演してはいるが、バンドのヴォーカル&ギターとしての印象よりブルース・タイプの SSW 的なコのある味わい。一匹狼の風格。2007 作。Cayuse Music)
- *EILEEN MCGANN:Beyond The Storm(Dragonwing) A

- *JANE SIBERRY: Shushan The Palace A
 (カナダの女性 SSW の Jane の本作は副題“Hymns of Earth”のクリスマス時期にあわせて制作された主に数世紀前のヘンデルやバッハ作曲曲を含む聖歌集。Jane ならではの優美な聖歌の世界。2003 作。Sheeba)
- *ENNIS SISTERS: Christmas B
 (ニューファウンドランドの美人3姉妹による美しいクリスマス・アルバム。トラッド・色も無いことも無いが、彼女等本来のフォーク〜カントリーなサウンドの姉妹の美声が活かされたフレッシュなクリスマス・アルバム。新年を祝うダンサブルな楽しい唄で幕。これはケブ・フレント・トラッド・色濃厚なトラッド・ロック。2002 作。Warner)
- *TIM HARRISON: Tim Harrison ¥1000
 (名作 79 年作“Train Goin’ East”と 85 年作“In the Barroom Light”からの 10 曲を新たに録音したもの。99 作。Second Avenue Songs)
- *KENNY BUTTERILL: Just A Songwriter B
 (米国在住カナダ人 SSW、Kenny の本作はバック&ゲスト {Willie P. Bennett, Ray Bonneville, Norton Buffalo, Joe Weed, Larry Hosford, Mary McCaslin, etc.} もばっちり固めた J. J. Cale 風似込み味 SSW アルバム。2003 作。No Bull Songs)
- *RAY MATERICK: Rockin’ The El Mocambo 82 a
 (CD-R。“El Macambo Tavern”での 82 年の重厚ライブ。ギター、ベース、ドラムス、チェロ、サクソによるバックはトランス重戦車のパワー。Ray のヴォーカルは火の玉。スロもアップテンポも手に汗握る入魂のロック。2002 作。KingKong)
- *RAY MATERICK: Ashes And Dust a
 (CD-R。最も音作りばっちりの僕等が知る 70 年代の Ray 風。ベース奏者がに懐かしい Tim Drummond。Ray のしゃがれ声の唄とがっちり噛み合うタイトな 70 年代風ロック。すべてが理想の SSW アルバム。Steve Smith のスティール・ギターも Michael Fanferra のオルガンも Lisa Winn&Bob Lamothe のバック・ヴォーカルもいい味わいた。抜群！2001 作。King Kong)
- *SCHULD&STAMER: You Got The Bread... We Got The Jam a
 (Stamer が全面的にヴォーカル。もうソックの J. B. Lenoir 作“Voodoo Music”から Stamer の泥つとしたブルース・マジックの世界へ引きづり込まれる。ゲストの Long John Baldry もヴォーカルで 4 曲飛び入り。生きたブルース。絶句。98 作。Blue Streak)
- *SHANNON LYON: Tales Of A Yellow Heart A
 (2000 年作“Summer Blonde”が人気だった S. Lyon の 97 年作。まるで Neil Young with Crazy Horse。粗削りな 70 年代風ロック。97 作。Swallow)
- *KATHY PHIPPARD: Outside Lookin’ In B
 (ニューファウンドランドの個性派女性 SSW のデビュー作。ピアノの弾き語りやに似せた感情の起伏の大きな唄達は魅力。極めてカナダの SSW 的個性。音作りも七変化。98 作。Candle View)
- *TAMMY FASSAERT: Corner Of My Eye A
 (ヴァンクーバー島丹後出身のさわやかな女性 SSW アルバム。ブルグラスとフォークがアコースティックに気持ちよくブレンド。彼女の濁りのなさは貴重。2000 作。Tam Can)

- *THE SWALLOWS:Turning Blue A
(Blue Rodeo の Glenn Milchem が The Swallows という名で作ったデ
ビュー・アルバム。70年代ブリティッシュ・フォーク〜ロック的香り漂う不思議ロック。ジヤケッ
トもサケ調。2000作。Magnetic Angel)
- *TONY KOSINEC:Almost Pretty A
(T. Kosinec の 79 作の 4 枚目。2000 作。Vivid)
- *SNEEZY WATERS:A Letter Home B
(テキサス・ミュージックやブルースをベースにした雑食性に富むルーツ・ロック。Sneezy
らしい個性が盛り込まれている。ヴェトナムの風格。97 作。Watershed)
- *GORDON LIGHTFOOT:A Painter Passing Through a
(G. Lightfoot の本作は、清々しくもある種枯淡の境地。w. Daniel
Lanois, Willie P. Bennett, Barry Keane, Terry Clements, etc. 98
作。Reprise)
- *FRANCESCA:Au-Dela Des Couleurs B
(フランス語、スペイン語、イタリア語、英語でつぶやくように、また情熱的に唄
う地中海ムードの女性 SSW アルバム。かなりの本格派だ。99 作。BMG)